

個を複製すること

19 世紀ヨーロッパにおける

アイデンティティを宿す身体の誕生

1996 年、イギリスのロスリン研究所の研究者イアン・ウィルムットらの手により生み出されたクローン羊「ドリー」は、成体の細胞を元にして作り出されたクローンの、哺乳類における最初の成功例として注目を浴びた。ウィルムットらはその前の年に、受精後まもなくの羊の初期胚からのクローンの作成に成功しているが、成体の細胞を用いたクローン作成の実験は、その延長上で試みられたものであり、両生類などで若干の成功例があるにとどまったこの実験を哺乳類で成功させたことで、人間への応用の可能性が、現実味を帯び始めたのである。ただしここで SF まがいの「クローン人間」を思い浮かべるのであれば、早計に過ぎるとの誇りを受けることになるだろう。こうして生み出されたクローンは確かに、通常の個体では両親からそれぞれ半分ずつの遺伝情報を受け継ぐところを、細胞を提供した成体とまったく同じ遺伝情報を持って生まれてくることになる。ただしそれは一つの受精卵を分かち合った一卵性双生児においてもまったく同じことであり、「クローン人間」と言ってみたところで、それは結局、一卵性双生児」[米本, 1997, p.26]にすぎず、「二人の個体は厳然として二人」[村上, 2000, p.88]であるのは、明白な事実なのだ。

クローンをめぐり同一性（アイデンティティ）を問題にすることはこうして、ヒト・クローンに異を唱える立場からも、まず最初に解消しておくべき誤解という扱いを受けることになる。一卵性双生児は、その際にしばしば引き合いに出される例であり、アイデンティティ問題は「無意味なもの」[村上、同]としてあらかじめ斥けられた上で、ヒト・クローンが現実誕生した場合を想定した、より現実的な問題へと議論が進められていくのだ¹。このように切って捨てられる「誤解」はおそらく、「クローン」という語に人間の「複製」というイメージがつきまとっていることに起

<http://repre.c.u-tokyo.ac.jp>

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論
表象文化論研究

1 (March, 2003): 18-43

因するのだろう。このイメージは、1960年代にクローン実験が動物（カエル）で試みられ始めた当初から、すでに根付いており、アルヴィン・トフラーは1970年の著書『未来の衝撃』の中で、クローニングによって「人間が自分自身の生物学的なカーボン・コピーをつくれるようになる」[Toffler, 1970, p.197, トフラー, 1982, p.241]可能性があると、やや煽動的な口調で語っている。クローン動物があくまで遺伝情報を共有する存在でしかないことは、もちろん当時から明らかなことであつたはずだが、オタマジャクシでは認識されないまま放置されていたクローン問題とアイデンティティ問題との混同が、哺乳類のクローンの登場に至ってはじめて、早急に解消すべき誤解として浮上してきたということだろうか。ともかくクローンとは「遅れて生まれた一卵性の双子」[Silver, 1997, p.125, シルヴァー, 1998, p.128]²にすぎないことは明白であり、現実の一卵性双生児に深刻なアイデンティティ問題が生じていないという経験的事実をもってして、同一性に関する議論は幕を下ろされる。だが、われわれの同一性が、遺伝子的な同一性に還元し得ないものだとすれば、いったいそれは何に基づいているのだろうか。例えばフランスの国家倫理諮問委員会の答申はそれを「精神的同一性」と呼んで、「遺伝子的同一性」との差異を強調するのだが、この「精神的同一性」がいったい何であるかについては、問われないままである³。キリスト教的な心身二元論を思わせる「精神的同一性」なるものはしかし、それほど自明のものなのだろうか。クローンにおいては問いそのものから排除される同一性の問題を、「同一性の複製」について考察することで、改めて問い直してみることが、ここでのわれわれの試みである。

アンドリュー・ニコル監督の映画『ガタカ』（1997年・米）は、遺伝子操作が日常的となった近未来の世界を舞台としている。そこは遺伝子操作によって優れた遺伝子を備えて生まれてきた人間と、そうした操作を経ることなしに「自然のまま」生まれてきた人間——彼らは「神の子」と呼ばれる——との間に、確固とした身分差が形成されてしまっている世界だ。こうした世界に「神の子」として生まれてきたヴァインセント（イーサン・ホーク）は、幼い頃から抱いてきた宇宙への夢を叶えようと、宇宙開発会社「ガタカ GATTACA」⁴への入社を試みるが、優秀な遺伝子を持つ者以外には、その門戸は閉ざされている。遺伝子による差別は法によって禁じられているものの、会社はその法をかいくぐって、入社希望者があちこちに残した髪の毛や汗などにより遺伝子の選別を行い、不適格者はあらかじめ振り落とされる仕組みとなっているのだ。彼に残された方途は、優れた遺伝子を持ちながら、不幸な事故などにより障害を抱えることになった人間に成り代わることであ

り、それを仲介する闇ブローカーすらこの世界には存在する。彼に遺伝子情報を提供することになったのは、ユージーン Eugene⁵（ジュード・ロウ）という若者であり、優秀な水泳選手だった彼は、交通事故によって今では車椅子生活を余儀なくされている。かつて『太陽がいっぱい』（ルネ・クレマン監督、1960年・仏／伊）の中でアラン・ドロンは、自らが殺した男に成りすますために、スクリーンに投射したその男のサインを執拗になぞって筆跡を摸写していたが、サインではなく遺伝子が身元特定に用いられている『ガタカ』の世界で、他人に成りすますにはいかにすればよいのか。その方法は単純にして巧妙である。この近未来の世界で身元確認のために用いられるあらゆる身体の詳細を、文字通り身につければよいのだ。すなわち、映画の冒頭で詳細に描き出されるとおり、まずは自らの体表を綿密に洗い流してから、指先には指紋を写し取った人口の皮膚を被せ、その下に少量の血液を流し入れ、目には虹彩を模したコンタクトレンズをはめ、股下には尿の入った袋——しばしば尿検査が試みられるため——を装着する。この世界での一番手軽な身元確認装置は、警察官が携帯する、指先を触れるだけで人物を特定するカード大の端末であり、指先に細工を施したヴィンセントがそれに触れれば、彼がユージーンであることが確認されることだろう。この装置に備わった小さなディスプレイには、ヴィンセントが触れた際に、彼と似ても似つかないユージーンの顔写真が映し出されるのだが、写真という旧時代の身元確認手段には、誰一人として注意を向けないのである。

姿形にはほとんど手を加えぬまま、ただ身体の詳細を付け替えるだけで、完璧にユージーンに成り代わったヴィンセントは、自分の、つまり「ヴィンセント」であることを示してしまう一本の睫毛を落としてしまったために、社内で起こった殺人事件の容疑をかけられることになる。いるはずのない人間であるヴィンセントの痕跡が発見されたことで、警察はたいした捜査をしないまま彼のことを犯人と決め付けてしまうのだ。これと同じような窮地に立たされるのが、『ガタカ』からちょうど90年前の、オースティン・フリーマンによる推理小説『赤い拇指紋』[Freeman, 1907, フリーマン, 1982]の中の人物、ルーベン・ホーンズビーである。ダイヤの原石が盗み出された金庫の中に残されていた血痕の上の指紋が、この金庫の所有者である貴金属商の甥にあたるルーベンの指紋と完全に一致し、残された唯一の手がかりがこの指紋だったこともあって、ここでもまた警察は、彼を犯人と断定してしまうのである。

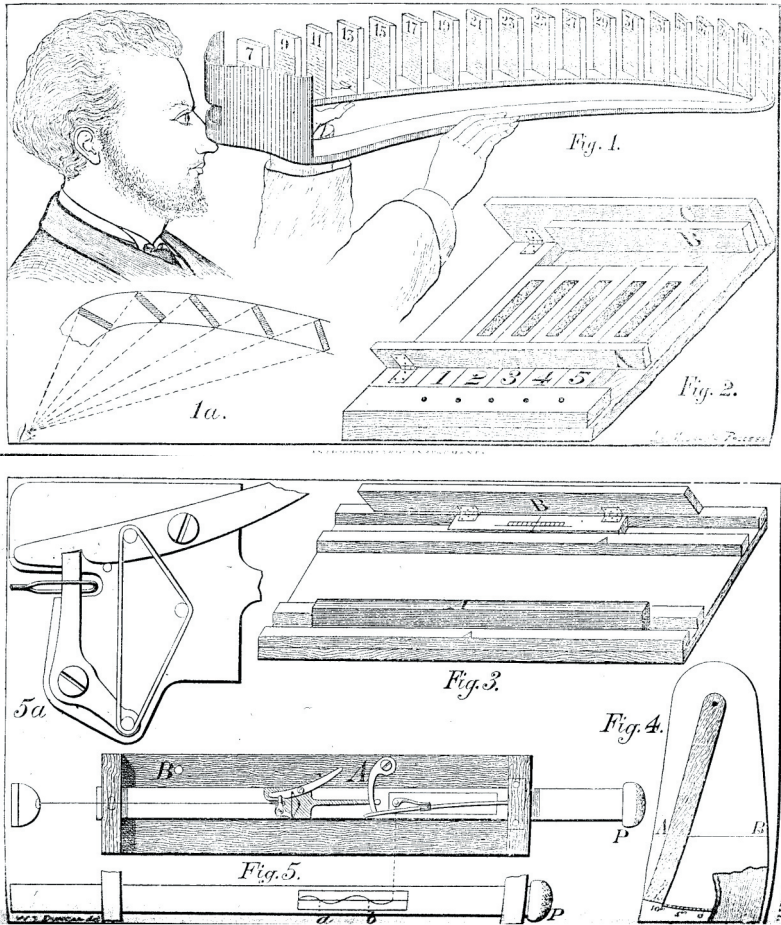
「われわれが方法を拝借したゴルトン式のほうが〔…〕この場合はもっと目的に適していますな。」[Freeman, 1907, p.42, フリーマン, 1982, p.50] 冤罪を晴らすべく立ち上がった主人公ソーンダイク博士に対して、警察が自信を持って名を挙げ

るこの実在の人物こそ、ロンドン警察が世界に先駆けて指紋を身元確認の手段として採用することに影響を与えた張本人、フランシス・ゴルトン⁶ (Francis Galton, 1822-1911) である。ダーウィンの従弟であり、今では悪名高きものとなった「優生学 eugenics」なる語の生みの親の遺伝学者・人類学者として、当時すでに名の知られていた彼が 1892 年に著した『指紋』[Galton, 1892a] は、指紋が生涯変わることはない身元特定の指標であることを主張し、その体系的な分類方法を示した、最初の書物とされるものである。とはいえ指紋に個人差があることは、ゴルトンが初めて明るみに出した事実であつたわけではない。例えばチェコの解剖学者・組織学者プルキニェ (Jan Evangelista Purkyně, 1787-1869) は、1823 年の論文の中ですでに、指紋の科学的な分類法を示していた⁷。このプルキニェの分類法はその後顧みられることがなかったものの、1880 年代に入って、イギリスの科学雑誌『ネイチャー』誌上で、指紋をめぐる議論がひっそりと取り交わされ始める。まずは 1880 年 10 月 28 日号に、「手の皮膚の起伏について」⁸と題されたヘンリー・フォールズの投稿が掲載された。当時東京の築地病院で外科医をしていたフォールズは、大森貝塚で発見された土器の表面に、土器の作り主を特定するために残されたと思われる指の跡の模様を見出して以来、指紋に興味を抱き始め、日本人とヨーロッパ人から採取した指紋の比較によるその人種間の違いや、その模様の分類、そして犯罪捜査への応用の可能性などについてを、この投稿の中で論じたのである。フォールズのこの投稿に即座に反応し、同誌に投書を寄せた⁹のが、インドのベンガル地方の行政官を経て 1878 年にイギリスに帰国していた、ウィリアム・ハーシェルである。彼は 1858 年にベンガルで現地人と交わした雇用契約書にサインではなく手形を捺させるということを試みて以来、主に指紋の不変性についての研究を、独自に進めており¹⁰、新発見を気取るようなフォールズの投稿に対して、自らの研究の優位性を主張せずにはいられなかったのだ。数多くの発見・発明に付き物であるように、この二人の間では発明者の名誉を争つてのせめぎあひがあつたのだが、ここでそれを詳しくたどる必要はないだろう¹¹。しかしゴルトンが後にフォールズを手厳しく批判し、高名な天文学者 (フレデリック・W・ハーシェル) の血筋を受け継ぐハーシェルに軍配を上げたことは、才能その他が遺伝することを主張して『遺伝的天才』[Galton, 1892, ゴルトン, 1935] なる著書を著したゴルトンならではのエピソードとして記憶しておくべきなのかもしれない¹²。いずれにせよ「両者はどちらも日常の警察業務に適うような分類システムを築き上げられなかった」[Brown and Brock, p.57] ことだけは確かであり、そしてこの分類システムへの足がかりを築いた人物こそゴルトンなのだが、それはひとえに彼が十分な指紋の「サンプル」を活用できる立場にあつたからに他ならない。

ゴルトンが多数の指紋を採取できたのは、1885 年から彼がサウス・ケンジントン博物館の一面に設立していた「人体計測研究室 Anthropometric Laboratory」の功績である。これはもともと前述の『遺伝的天才』(1869 年に初版)以来の彼の関心であった遺伝研究の理論化のために、「身体および精神の計測可能なあらゆる能力に関する多数の正確な数値」[Galton, 1908, p.244]の蒐集を目指して設立されたものだった。彼はこの他にも『家族の能力の記録 Record of Family Faculties』(1884)で総額 500 ポンドの懸賞金を賭けて、年齢や出生地、子供の数、髪と目の色、身長、近親者の死因などについての質問への回答を返送するように読者に呼びかけ、およそ 150 人からの返答を得ていたが、例えば「多くのケースで身長の計測値は靴を脱いで測ったのかどうか」[Galton, 1889, p.78]疑念が残るなどしたため、かねてからの念願であった「人体計測研究室」を、1884 年にロンドンのサウス・ケンジントンで開催された「国際健康博」の一部に、自費で開設することを申し出たのだった。その「研究室」とは彼自身の回想によれば以下のようなものだった。

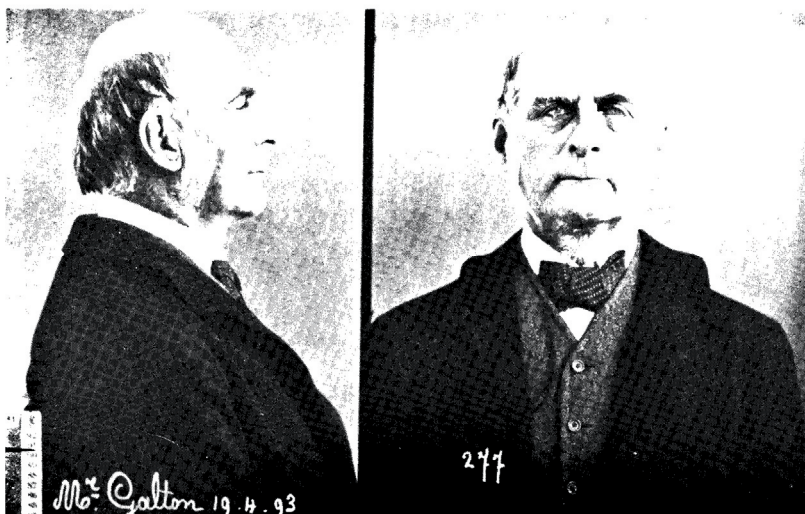
「1884 年の万博が企画されていたときに、私はそこに研究室を設立・運営することを申し出た。〔…〕これが受け入れられたので、私は両端を格子でふさいだ長い廊下を作った。格子から格子へはテーブルを渡し、その上に申込者が検査を受けるための器具を置き、またテーブルと壁の間には通路も確保した。プライバシーをほぼ確保しながら、中で何が行なわれているのかも大体わかる仕組みだ。〔…〕計測されるのは、視力・聴力、色覚、目測、肺活量、反応時間、腕力、身長および座高、そして体重である。器具の取り扱い是非常に簡単だったので、申込者はいずれも漏らさずに計測を受け、結果を記したカード——統計学的目的のためにその複製が作成・保存される——を、〔…〕わずか 3 ペンスの入場料で入手できるのである。」[Galton, 1908, pp.245-246] (図版①も参照。)

腕力を計測する器具は「愚かで素直でない」[Galton, 1908, p.246]人々によって早々に壊されてしまったり、「婦人方が帽子を取る必要があり、ヘア・スタイルも乱れるだろうから」[Forrest, p.181]頭のサイズを測るのは見送られるなど、ゴルトンの満足げな回想とは裏腹に、珍奇な光景が繰り返られていたに違いないこの起源的な 3 ペンスの身体検査は、物珍しさも手伝ってか、そこそこの人気を博し¹³、これに気をよくしたゴルトンは、博覧会の終了後もこの研究室が継続されるよう働きかけ、運良くサウス・ケンジントン博物館の一室を確保できたので、彼の「人体計測研究室」はそこで 1885 年から 6 年間にわたって活動を続けることになった。



図① ゴルトン「人体測定実験室」で用いられた器具類。[Galton, 1884a]

しかし指紋はゴルトンのこの研究室の測定項目に開設当初から含まれていたわけではなかった。彼の研究室が指紋を採取し始めたのは、1890 年になってからのことにすぎない。その間イギリスにおいて指紋についての研究にこれといった進展はなく、1880 年の『ネイチャー』誌上でのフォールズとハーシェルのやり取りも、ゴルトンの目には留まらなかったようだ。フォールズは『ネイチャー』への投稿の他にも、人種による指紋の違いについて指摘した書簡をチャールズ・ダーウィンに送っており、すでに高齢だったダーウィンに代わってこの書簡は従弟であるゴ

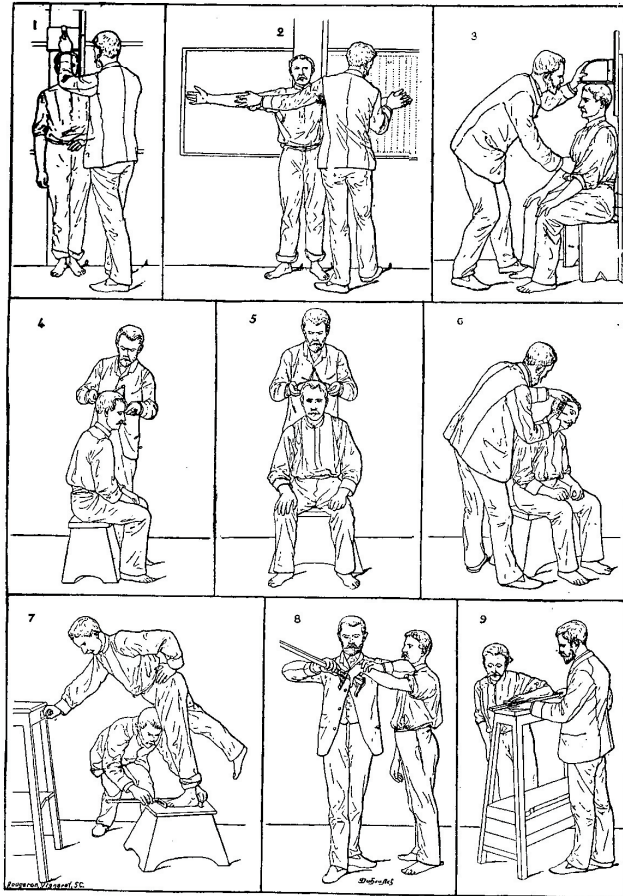


図② ベルティヨン方式によるゴルトン。[Forrest, 1974]

ルトンに託されたはずなのだが、それすら彼の記憶からはこぼれ落ちてしまっていたようだ。フォールズはさらに 1885 年の日本からの帰国後に指紋の有用性をロンドン警視庁に訴えもしたが、まともに取り合われることはなかった。転機が訪れるのは 1888 年である。この年にゴルトンは英国王立学士院から講義の依頼を受けるのだが、これは同じ年に彼が偶然見学して来ていた¹⁴ パリ警視庁の「ベルティヨン方式」による個人識別についての報告を求められてのことだった。「ベルティヨン方式 Bertillonage」とは、アルフォンス・ベルティヨン (Alphonse Bertillon, 1853-1914) が開発した、人体各部の寸法の計測と司法写真による個人識別法の総称である。「個人の同定と記述」と題されたこの講義の要旨は、その後『ネイチャー』誌に掲載されている¹⁵。ゴルトンはこの中で、頭の縦幅および横幅、足の大きさ、中指の長さを主な指標とするベルティヨン方式の人体計測を手短に紹介した後、例えば足の大きい人間は指も長いように、これらの指標は互いに相関的であるため分類は十分なばらつきを得られないとし、より独立した指標として、指紋を用いることを提唱したのである。

パリ警視庁が 1882 年に採用して以来、幾度かの改良を経てきたベルティヨン方式による人体計測は、1892 年の時点では、以下のような 11 項目におよぶ細分化した計測から成っていた。(図版③も参照のこと。)

ABSTRACT OF
THE ANTHROPOMETRICAL SIGNALMENT



- | | | |
|--------------------|--------------------------------|------------------|
| 1. Height. | 2. Reach. | 3. Trunk. |
| 4. Length of head. | 5. Width of head. | 6. Right ear. |
| 7. Left foot. | 8. Left middle finger.
(ii) | 9. Left forearm. |

図③ ベルティヨン方式による人体計測の模式図。[Bertillon, 1896]

全体的な身体の計測

- ・身長（直立した人間の身の丈）
- ・リーチ（両手を広げて伸ばしたときの指の先から先までの長さ）
- ・胴体（座ったときの高さ）

頭部の計測

- ・頭の長さ
- ・頭の幅
- ・右耳の長さ
- ・右耳の幅

手足の計測

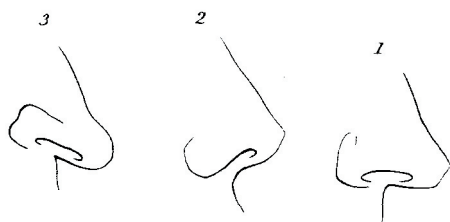
- ・左足の大きさ
- ・左中指の長さ
- ・左小指の長さ
- ・左前腕の長さ

[Bertillon, 1896, p.15]

計測はゴルトンよりもはるかに細部へと及んでいるとはいえ、身長と座高、それに結局は断念したもののゴルトンも頭部の計測を目論んでいた¹⁶ことを考え合わせれば、彼の「人体計測研究室」と、このベルティヨン方式の人体計測との間に、類似を見ることはたやすい。しかし警視庁に籍を置くベルティヨンが、ひたすら再犯者の同定を目的に人体測定法を練り上げていたのに対し、ゴルトンは本来、人間の身体能力や体型の遺伝を研究するための数値を得ようとして研究室を設立したのであり、色覚や腕力の測定が組み込まれていたのもそのためである。上記の1888年の王立学士院での講義でゴルトンが個人識別の有力な手段として持ち出した指紋にしても、1890年に彼が自らの研究室で指紋を採取し始めて以降は、犯罪捜査のための利用と並んで、ちょうどメンデルがエンドウの種子の形や花の色を指標に遺伝の研究を行なったように、指紋をヒトの遺伝の指標として利用することも考えており、人種による指紋の違いや、さらには階級差による違いさえも研究していた¹⁷。また指紋がどのような機能を果たしているのかということも、彼にとつての重要な関心事であった。従兄であるダーウィンの進化論のよき理解者であった彼としては、指紋が自然選択を経て存続してきたからには、それが何らかの機能を果たすものでなくてはならなかったのである¹⁸。こうしたことのためか、ゴルトンによる指紋の分類は、犯罪捜査に応用するには煩雑にすぎ、実用に適った分類体系を完成させたのは、ハーシェルと同じくインドの文官出身で、その後ロンドン

警視總監にまで登りつめた、『指紋の分類と応用』[Henry, 1900]の著者、エドワード・R・ヘンリー (Edward R. Henry, 1850-1931) だった。

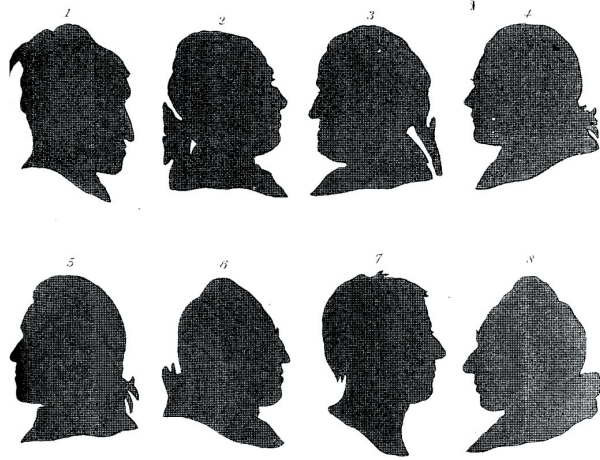
ゴルトンは 1891 年、ベルティヨンに書簡を送り指紋の効用を訴えている。また 1894 年には、ベルティヨン方式の採用を検討していたロンドン警視庁が、その全面的な採用を見送り、一部を指紋で置き換えることを決定した。これらのことを受けて、1894 年にベルティヨンは彼の人体計測法の中に指紋を取り入れるに至る。ロンドン警視庁がベルティヨン方式に代えて上記のヘンリーによる指紋分類法の採用に踏み切るのが 1901 年になってからのことであるのと考えれば、ベルティヨンによる指紋の採用は、決して遅きに失していたわけではない。しかし「残念ながら、英国のフランシス・ゴルトン氏の独創的な研究にもかかわらず、自分自身から取り出されるこれらのデザイン〔＝指紋…引用者注〕は、数十万の事例を収めるファイル内の分類の基盤として用いるに足るほどの、十分に区別しうる多様性の要素を含むものではないのは、疑う余地のないことなのだ」[Bertillon, 1896, p.14]との言葉からも分かるように、指紋はベルティヨン方式において、刺青や烙印に類するような補足的要素の域を出ることはなく、採取されるのも一部の指の指紋にとどまった。指紋のみで人物を同定することに対して、ベルティヨンが抱いていた根強い疑念は、生涯晴れることがなかったようである¹⁹。だが同じく補助手段として彼が用いた司法写真において、被写体の腰掛ける位置やカメラとの距離、視線の方向などを厳密に定めて、移ろいゆく生をなんとかフィルムに固定させようと腐心していたベルティヨンであってみれば、「生とは絶え間なく変化する条件である」[Galton, 1884a, p.207]と正当にも指摘するゴルトンが、その絶えざる変化にさらされた人体の中にあって唯一終生不変の部位として認めた指紋とは、彼にとってもやはり願ってもない部位として特権的な扱いを受けたとしても不思議ではなかったはずである。しかしながらフランスにおける人類学会の創設に携わったレイ・アドルフ・ベルティヨンの息子として、一時は人類学者を志したベルティヨンが見出しえた計測の対象とは、例えば頭の大きさなど、父と同じくパリ人類学会の創設メンバーで頭蓋計測学の権威だったポール・ブロカがすでに人類学的な価値を認めていた部位に限られており、インドや日本から価値の認められ始めた指紋が、アカデミック志向の彼の視界に入りにくかったというのは、想像しがたいことではない。また彼は額や鼻、耳などにも注目し、重要な指標として特長を記載することを主張したが、これらの各部位も、18 世紀の観相学者ラヴァター (Johann Caspar Lavater, 1741-1801) に代表されるように、西洋において伝統的に眼差しが向けられてきた部位ばかりなのだ。



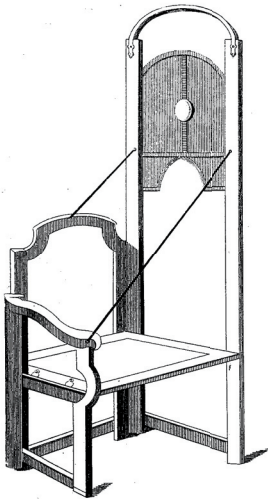
図④ ラヴァターによる鼻の分類。[Lavater, 1847, Plate LXIV] (部分)

「お望みとあらば、鼻は三つの主要な類にまとめるとしよう。1. 一番下の部分の輪郭線を含めた、下部もしくは鼻腔が、水平と見なしうるもの。これらはもつとも美しく高貴にして、活力にあふれる。しかし非常に稀でもある。2. 鼻腔を含めた下部の輪郭線が、上向きなもの。[...] 3. 鉤鼻、それはしばしばメランコリーを表す [...]。」[Lavater, 1847, p.456] (図版④も参照。)

スイスの牧師であるラヴァターの観相学は、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ヨーロッパ各地でセンセーションを巻き起こしていた。各国語に翻訳された彼の『観相学断章』²⁰(1775-78)には、アリストテレスにまで遡るという観相学を、科学の名に値するものへと引き上げるために必要な、予想される様々な反論への論駁や、観相学者を志す者たちへ向けての心構えと合わせて、観相学による解釈の実践が豊富な図版と共に収められている。その中の「人体のいくつかの部位について」²¹と題された一節に取り上げられているのは、上記に引用した鼻に加えて、額や目、唇に顎など、そのほとんどがおおよそ一世紀後にベルティヨンによって人物特定の決め手として注目されることになる部位ばかりである。また観相学とは「動きのある部位の静止中の姿」が露呈させる「静止中の特徴」[Lavater, 1847, p.12]についての科学であるとするラヴァターは、「固定したものは何一つとしてなく、すべてが儼く移ろいやすい」[Lavater, 1847, p.172] 自然そのものよりも、肖像画や、さらには横顔の影を写し取ったシルエットこそが、「単なるネガのようなものに過ぎない」とはいえ、「もつとも腕の立つ画家でも描けないような、自然の直接的表現」[Lavater, 1847, p.188] であるとして、観相学的観察の対象に用いることを推奨し、シルエット像を写し取るのに最適な椅子すら考案している (図版⑤～⑦)。そしてベルティヨンにとってもまた、司法写真においては、常に同じ姿で被写体の静止像をフィルムに焼き付けることこそが必要とされたのであり、彼もやはり被写体を一定



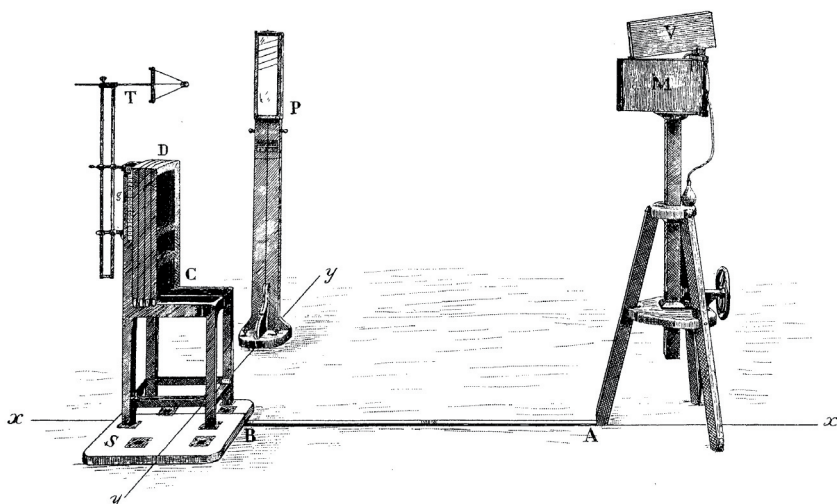
図⑤ ラヴァター、シルエットの観相学。[Lavater, 1847, Plate XXVII] (部分)



図⑥ ラヴァターのシルエット椅子。
[Lavater, 1847, Plate XXV]



図⑦ ラヴァターのシルエット椅子。実践。
[Cortine et Haroche, p.127]



図⑧ 椅子を含めたベルティヨン方式による撮影キット。[Bertillon et Chervin, *Anthropologie métrique*, Paris, Imprimerie Nationale, p.68]

の倍率で撮影することを可能にする椅子を開発してみせてくれるはずだ(図版⑧)²²。

だがこうして同じような部位に視線を送りながらも、ラヴァターの関心は単にそれらの部位の寸法にあるわけではない。「われわれの似姿に、われわれにかたどって人を造ろう」という「創世記」の一節を『観相学断章』序文の冒頭に掲げるラヴァターにとり、「人の容貌〔とは〕、神性の鏡であり、創造主のもっとも高尚な作品」[Lavater, 1847, p.14]であって、「瞳や目つき、頬や口、額は、〔…〕もっとも説得力のある内面性の像」[ibid., pp.8-9]である。例えば鉤鼻はメランコリーであったり、あるいは青い目は茶色や黒よりも「弱さや柔和さ」[ibid., p.383]を示すなど、外面的特徴は内面的資質を表現する記号であり、観相学とは、それらの記号にこめられた意味を正確に読み解くための「科学」なのだ。

「横顔から見た鼻筋の形はいずれも次の三つのタイプのうちの一つに該当する。凹型 (con)cave：直線 rectilinear：凸型 convex もしくは山型 humped。」[Bertillon, 1896, p.155] (図版⑨も参照。)

ラヴァターと同じようにベルティヨンによって三つに分類されたこれらの鼻の形は、当然ながらもはや「高貴さ」や「メランコリー」といった内面的資質を表現

SYNOPTICAL TABLE OF THE FORMS OF THE NOSE



1. Nose with profile (con) cave elevated.



4. Nose with profile rectilinear elevated.



7. Nose with profile convex elevated.



2. Nose with profile (con) cave horizontal.



5. Nose with profile rectilinear horizontal.



8. Nose with profile convex horizontal.



3. Nose with profile (con) cave depressed.



6. Nose with profile rectilinear depressed.



9. Nose with profile convex depressed.

図⑨ ベルティヨンによる、鼻の分類のためのポートレート。
[Bertillon, 1896, Plate33]

することはない。ベルティオンに関心があるのは、それらがどんな内面性を表しているのかではなく、単にそれらがどんな形をしているのかだけである。鼻・目・耳などの極めて「ラヴァター的」な各部位は、それらを引き継いだベルティオンによって、内面性・精神性から引き剥がされ、それ自身の形状の微小な差異のみが注目されることになったのだ。指紋という、西洋において精神性を体現するという経歴を持つことのなかった新奇な細部が、ただその微小な差異によってのみ、インドや日本から存在を主張し始めるようになるのは、そこからあと一歩である。

1887年の『緋色の研究』ではじめて世に登場し、1891年からの『ストランド・マガジン』誌での連載で人気を博すことになる私立探偵シャーロック・ホームズの活躍した時代は、指紋が「発見」され犯罪捜査に利用されるようになる時代とほぼ重なり合うわけだが、彼が指紋に対して向ける眼差しは思いのほか冷やかだ。ブラウンおよびブロックによれば、ホームズ作品の中で指紋への言及が見られるのは、全作品を通してわずか四箇所に過ぎず、あとはほんの些細な言及が二箇所あるだけだという[Browne and Brock, pp.71-72]。主だったものの一つである「ノーウッドの建築業者」(1895)にしても、「同じ指紋が二つとないことはご存知ですよ」という刑事の問いかけに対し、ホームズは「そういう話ですな」とそっけない[ドイル, 1997c, p.571]。「海軍条約」(1889)の中で「ベルティオンの人体測定法を話題にして、このフランスの学者を熱心に称賛していた」[ドイル, 1997b, p.311]というほどのベルティオン派の彼——「バスカヴィル家の犬」(1888)ではベルティオンに次ぐ「ヨーロッパ第二の権威」[ドイル, 1997a, p.345]と見なされて腹を立ててもするものの——が、指紋にさしたる興味を示さない代わりに、「ボール箱事件」(1889)においては、ベルティオンにとっても特権的な部位であった耳の特徴を目ざとく見極め、「どの耳にも、原則としてそれぞれ著しい特徴があつて、他のどんな耳とも違っている」[ドイル, 1997b, p.389]ということについて、人類学の学術誌に論文を発表したとまで公言しているのは、当然のことだと言えるのかもしれない。指紋の特性を極めつくして事件を解決させるのはホームズよりもむしろ、既に述べたA・フリーマン作『赤い拇指紋』(1907)の主人公で、この作品が好評を得たことによりその後シリーズ化することになる、ソーンダイク博士の方である。

博士という名に違わず医師であり科学者のソーンダイクは、ホームズと違って探偵を生業としているわけではなく、れっきとした弁護士として必要とあらば法廷に立ちもする法医学者である。顕微鏡を操り細胞レベルの発見を数多く成し遂げた組織学者プルキニェによって最初の分類化が試みられた指紋とは、ホームズよりも、

「法医学の最後のよりどころは顕微鏡だ」[フリーマン, 1977, p.199]と語る科学者のソーンダイクにこそ似つかわしい部位であったのだろう。既に記したように彼は『赤い拇指紋』において、犯罪現場に指紋が残されていたことから犯人に仕立て上げられた若者の冤罪を晴らし、真犯人が用いた指紋のトリックを見事に暴き立ててみせたのだった。そのトリックとは彼自身の説明によれば、写真の銅板を応用したもので、あらかじめ採取してあった指紋を写真に撮ってネガを作成し、それを特殊なゼラチンの上において光を当て、そのゼラチンを熱湯に通すと、光に当たった部分のみが溶けずに残り、指紋そのもののスタンプが出来上がるのだという。ソーンダイクはこのスタンプを実際にいくつも作ってみせ、法廷で指紋鑑定の専門家たちに一泡吹かせて、被告人の無実を勝ち取ったのであった。

フリーマンが描写するこのトリックの真偽はともかく、指紋が当初から写真というメディアと類縁性の強いものであったことは事実である。その紋様を細部にわたって検証するためには写真による拡大技術が不可欠であったのは言うまでもなく、ゴルトンは指紋の研究に着手する以前から写真の取り扱いに長けており、複数の肖像写真を重ね焼きすることで、個体差を捨象して病人やユダヤ人などの「本質」を取り出そうと試みた「合成肖像 composite portraiture」²³は、フロイトが『夢判断』で、複数の人物が夢の中で一人の人物に重なり合う「同一化」の現象の説明に援用もしている²⁴。しかし指紋と写真を殊のほか結びつけるのは、「誕生から死までのほぼ完璧な不変性」[Galton, 1892a, p.10]という、指紋の特質そのものである。身体各部を計測することでベルティオンが目指したのは、身元特定の決め手となる生涯変化しない数値を求めることであったのだが、「人の身長は朝の起床時と夜の就寝時では優に3分の1インチは異なる」[Galton, 1888, p.175]とのゴルトンの指摘を待つまでもなく、人体計測による身元特定が「21才以下となると難しく[...]、18才以下になると絶対に不可能」[Bertillon, 1896, p.239]であることは、ベルティオン自身も認めるところだった。数値や文字による特徴の記載だけで基本的には十分だと考えていたベルティオンが司法写真の併用を推奨するのは、そうした未成年者の身元特定を確実なものとするためであり、それは「絶え間なく変化する条件」(ゴルトン)であるところの身体を、特殊な椅子などを用いて人為的に作り出された一定の条件のもとで撮影することにより、写真という不変のメディアに、言わば無理やり固着させようというものだったわけだ。生涯不変である指紋とはだから、ベルティオンにとつての司法写真のような、言ってみれば身体自身に刻み込まれた写真である。そのため指紋は複製可能という写真特有の属性を容易にまとめて、オリジナルとコピーの区別なく増殖するアイデンティティというファンタスムの一般化に一役買うことになるだろう。

「お互いに完全に似通った二つの精神を見出すことは〔…〕不可能である」[Lavater, 1847, p.13]。ラヴァターにおいて主体の個別性を無条件に保証してくれていた内面性との結びつきを失ってしまった身体は、ゴルトンの言うように朝と夜でその大きさが変わってしまうような移ろいゆく不定形の塊でしかない。そんな身体をペルティヨンは、数値あるいはフィルムに固定することで強引にその同一性を保とうとしたわけだが、指紋の「発見」によって、もはやその必要もなくなる。指紋によって身体は、自分自身の裡に自らの同一性の準拠を獲得したのである。ただしその同一性とは、ラヴァターの内面のような想像的な次元から身体にまとまりを与える自我とはすでに関係がなく、ただ生まれてから死ぬまでの間ほとんど変わることなく存続するという、時間的な同一性にすぎない。むしろそれは「誕生」や「死」にすらほとんど関係がなく、「生まれる前から存在し、死んだ後も、腐敗して消えるまでは残っている」[Galton, 1892a, p.10]。したがって指紋はそれ自体では、その持ち主である主体との同一性を初めから取り結んでいるわけではない。例えば犯罪現場に残された指紋が容疑者のものであることが分かるためには、あらかじめその容疑者の指紋が採取されていなければならない。指紋はあらかじめ押捺されその所有者が登録されていなければ、身元特定の用をなさないのである。それはちょうど写真としての指紋に、持ち主の名のキャプションを付ける作業にも似ている。

『グラモフォン・フィルム・タイプライター』の中でキットラーは、ロマン主義的な魂を備えたまとまりを持つ身体を、ラカンの用語を借りつつ「イマジネールなもの」と呼び、書物には宿ることのできたそれらのイマジネールなものが、グラモフォンなどのメディア・テクノロジーの出現によって「不可能な願望」[キットラー, 1999, p.139]となる様を語っている。例えばエティエンヌ＝ジュール・マレーの連続写真によって分断された身体や、エディソンのフォノグラフによって周波数に還元された音声には、もはやイマジネールな身体像の宿る余地はない。そしてキットラーは、以下の引用にあるように、ゴルトンの指紋捜査法も、そうしたメディア・テクノロジーの一つに数え上げている。

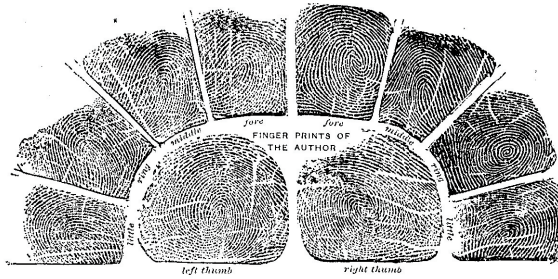
「個人が裡に抱えているイマジネールな身体像であれば書物もこれを記録し、伝えることができる。だが指紋やイントネーションや足跡その他の、意識しないうちに秘密をばらしてしまうような徴はメディアの独壇場であり、メディア抜きでは記録にすることも判定することも叶わない。フランシス・ガルトンの指紋捜査法とエディソンのフォノグラフは時代を同じくしていて、しっかりと相互に連携しあっているのである。」[キットラー, 1999, p.140]

文字通り「デジタル」なメディアとしての指紋は、イメージなままとりとしての身体像とは無縁であり、キャプション付けをしないことには、持ち主である主体との結びつきを得ることすらできない。メディア・テクノロジーとしての指紋は、徹底して断片化した単なる身体の一部であり、それが個人の内面や嗜好を反映することは勿論ありえないはずだ。しかし自らの著書の扉に、「著者の指紋」という文字列を取り囲むように自分の十本の指すべての指紋を装飾してみせる（図版⑩）ゴルトンにとって、それが自らの指紋であることは自明のことであるかのようなのである。それは「F.R.S（王立協会特別会員）」の称号を持つ名士ゴルトンによる、自分の指紋が犯罪現場から検出されることなどよもやあり得ないことの、高らかな宣言にも見えてくる。自負心と気概とが込められたその指紋は、ゴルトンにとってはまさしく「私」そのもののようですらあるのだ。

身体の時間的な同一性・継続性を示すものでしかない指紋が、キットラーなら「イメージなまもの」と呼ぶであろう内面性を引き連れて、主体そのものを表象する。ゴルトンにとってはだから、指紋によって保証される身体の同一性こそがすなわち、主体としての同一性なのだ。身体と主体との、不可能なはずのこのような同居が、可能であるかのように事態が進行したとしても、ひとまず問題を引き起こさずにすんでいたのは、同一の身体を持つ者がこの世に二人としていないということ、無条件に前提とすることができていたからである。同一性を備えた身体こそが、唯一無二のかけがえのない「私」だ。同一の身体（もしくはその一部）が複製されることによりアイデンティティに混乱が来たすという事態は、『赤い拇指紋』から『ガタカ』にまで脈々と息づくフィクションの世界の話として、とりあえず受け流しておけばすんだはずだった。

クローンが細胞レベルでの身体の複製だと誤解され、それがアイデンティティ問題を引き起こすという事態とはしたがって、どれほど「馬鹿げた議論」[村上, 2000, p.88]であるにしても、ゴルトンの手によって指紋による身元特定が信憑性を獲得したときからすでに、伏線が張られていた事態だと言わざるを得ない。もちろん誤解のないように断っておけば、クローンとは身体の複製などではまったくなく、既に指摘したようにそれは遺伝子的には一卵性双生児と何ら変わるところのない存在であり、指紋や虹彩なども異なって生まれてくるであろうことは明らかだ。仮にヒト・クローンが現実のものとなった場合には、クローン技術の手を借りて生まれてきた人間が「複製」であるとの偏見から来る本人の劣等感や社会的な差別こそが、おそらく最大の現実的な「倫理」問題である以上、こうした誤解が早急に解消されるべきものであることは言うまでもない。しかしアイデンティティの問題

FINGER PRINTS



BY
FRANCIS GALTON, F.R.S., ETC.

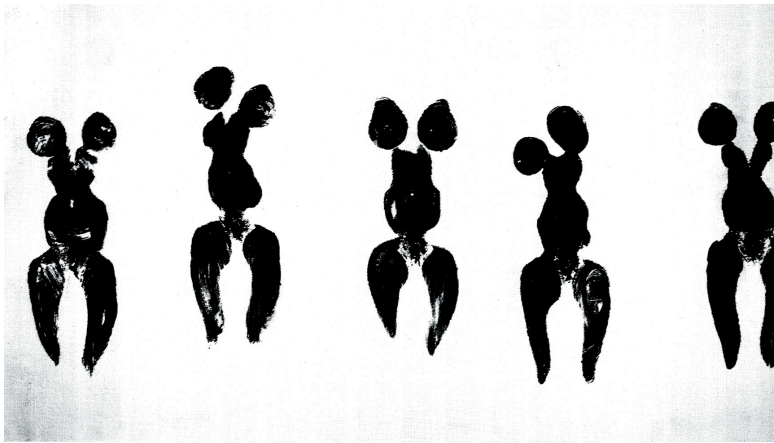
London
MACMILLAN AND CO.
AND NEW YORK
1892

All rights reserved

図⑩ ギャルトン『指紋』、扉に捺された著者の指紋。[Galton,

は、確かにそれをクローンにおいて問題にすることはナンセンスであるにしても、身体の同一性が根拠となっている限りは、また別の新たな技術によって身体複製の可能性が取り沙汰される度に、再燃しつづけることだろう。クローンが一卵性双生児であることをもってして、アイデンティティ問題の決着とすることは、単に問題を先送りすることではしかない。かといってフランスの国家倫理諮問委員会の答申のように、「精神的同一性」などという、ラヴァター時代の遺物にも似たものを持ち出してくることも、身体が内面や精神から切り離されたベルティオン以降を生きるわれわれには、もはや許されてはいないはずなのだ。

“IKB(International Klein Blue)”と自ら名づけた独自の青を中心とするモノクローム絵画を、1950年代後半から発表し続けてきたイヴ・クライン (Yves Klein, 1928-62) は、1960年から、モデルの全身に青いインクを塗って、その部分像を紙に写し取った連作を発表し始める。まとまりを欠いた身体が、部分的に型どられたその連作を彼は、「人体計測 les anthropométries」と名づけた (図版⑪)。ゴルトンによって指紋を採取される指先と同じように、ただしここでは全身にインクを塗らた身体が残すその痕跡は、ベルティオン方式の人体計測におけるような、断片化した身体痕跡である。しかしその痕跡は奇妙なことに、デジタル・メディアとしての指紋や、ベルティオン方式によって計測された人体各部の数値に



図⑪ イヴ・クライン、「人体計測 anthropométries」。[Beaux arts magazine
Hors série Yves Klein]

は入り込む余地のなかったはずの、具体的な身体のみよりの存在を感じさせずにはいない。等身大に型どられた人体各部の痕跡は、かつて一度そこに接触したであろうはずの、誰も知らないモデルたちの漠たるイメージを、観る者に残すのだ。型どり (empreinte) —— そこには当然指紋 (empreinte digitale) も含まれる —— による作品が残すそうした漠然とした印象のことをディディ＝ユベルマンは、イヴ・クラインのそれも含んだ型どり作品により構成された自らの企画展 (Centre Georges Pompidou, 1997) のカタログの中で、次のように語っている。

「[...] 型どりにより生み出された物体 (objets) のパラドクスとはまさにそれだ。つまり接触 —— それらの物体はこの接触の合法的管財人である —— はしばしば強烈で、反論の余地がないのだが、かといってこの接触は、現実におけるその参照項との抜き差しならぬ同一化を、われわれに保証するわけでもない。確かに結びつきはある、だが誰との、何との、どんな瞬間との、どの身体＝起源との結びつきなのだろうか？ それをわれわれは確信を持って語ることができない、というのも型どりにおいては [...]、それに特有でなおかつ到達不能の接触の記憶以来、隔たりこそが刻印され、われわれに触れ、言わばわれわれに〈刻み込まれる＝印象づけられる *impressionne*〉のであるから。」 [Didi-Huberman, 1997, p.181] (強調はディディ＝ユベルマンによる。)

かつてそこにあったであろうはずの、もはやそこにはない身体のみよりを、想像の中に回帰させるこれらの型どりは、キッターに言わせれば、失われたイマジネールな身体を追い求めるノスタルジックな営みにすぎないのだろう。しかしそうしたイマジネールな次元のものが、その宿る余地のないはずの指紋というデジタル・メディアの中に、易々と同居する様も、ゴルトンにおいてわれわれは目にしたのだった。だとすれば型どりにおける接触の痕跡が引き連れてくるイマジネールな身体像は、ロマン主義的な魂の亡霊であるよりも、メディア・テクノロジーが抑圧してきたものの回帰であると言えるのかもしれない。クローンにおいてアイデンティティ問題が取り沙汰されるときに回帰しているのもまた、その抑圧であるとすれば、身体がイマジネールなものと結びつくのを取りやめたとされる時点へと、われわれは再び立ち戻ってみる必要があるだろう。身体がラヴァターのような内面性の裏打ちから解放され、それ自身のみで自立を始めたと思われたときに、生じていた事態とはいかなるものであったのか。それを問い直すことによってわれわれは、19世紀ヨーロッパにおいて同一性の基盤が身体へと移動して以来、その身体に亡霊のように付き纏うことしかできなくなったイマジネールな身体像に、新たな地位を与え直すことができるはずだ。

註

1. 典型的なものとして、フランスの国家倫理諮問委員会 (Comit consultatif national d' éthique) の、1997 年 4 月 22 日——『ネイチャー』誌のドリー論文掲載 (1997 年 2 月 23 日) の二ヵ月後——の答申が挙げられる。この答申の「倫理的考察」の章では、「遺伝子的同一性」と「個人の同一性」との混同が「科学的根拠に欠くもの」であることが、一卵性双生児の例を交えて確認された後、ヒト・クローンが「個人の遺伝的特性」に対する侵害であること、また移植用臓器を得るためにクローンを作るなどの「個人の忌めしき道具化」に結びつきうることを挙げて、ヒト・クローンに対する倫理的懸念を表明している。なおこの答申の全文は、http://www.marianne-en-ligne.fr/97-09-15/e_a1.htm で見ることができる。
2. Remaking Eden と題された、クローンが人間の複製ではないことを説明する生物学者リー・M・シルヴァーのこの著書に、『複製されるヒト』という訳題が付けられているのは皮肉である。
3. 前述、1997 年 4 月 22 日の答申。この答申はさらに、成長段階での後天的影響を受ける「生物学的同一性」についても言及しており、「遺伝子的同一性」はそれとも異なるとしている。
4. 映画のタイトルともなっているこの社名が DNA の塩基配列の基本単位 A,T,G,C のアナグラムであることは明白である。
5. 「優れた」eu「遺伝子」gene と読み、「優生学」eugenics にも通じる名である。
6. ゴルトン、ゴルトン、ガルトンとも表

- 記されるが、ここではゴルトンに統一する。
7. プルキニエによる指紋の分類については、[ギンズブルグ, 1988, pp.219-220] 参照。ゴルトン自身もプルキニエのこの 1823 年のラテン語論文「視覚器官と皮膚組織の生理学的検査についての論考」(Commentatio de examine physiologico organi visus et systematis cutanei) に言及し、その先行性を認めている [Galton, 1892a, pp.84-85]。
 8. [Faulds, 1880]
 9. [Herschel, 1880]
 10. cf. [Herschel, 1916], および [渡辺, 1994]。なお渡辺は、指紋をめぐってイギリスを中心に日本やインドを巻き込んだこの様相に、世界的な「交通のネットワーク」[渡辺, 1994, p.201] の広がりを見ているが、このネットワークに南方熊楠の名を加えることもできるだろう。彼は『ネイチャー』誌上に、指紋が中国で古くから身元特定に用いられていたことに疑念を示したハーシェルの投稿に対して、反論の記事を寄せ [Minakata, 1894]、また彼自身の発言によれば、「かつて指紋法は古くから東洋にあったというばかりで明証がない」と公言したゴルトンは、南方が「明証を公表したので首肯した」[南方, 1916] という。
 11. フォールズとハーシェルの確執については、[Brown and Brock, 1954, pp.51-59] 参照。
 12. [Forrest, pp.212-213] 参照。ウィリアム・ハーシェルの名は『遺伝的天才』の中でもハーシェル家の血筋の「優秀」さ

を示す一人として挙げられており、「ベンガルの文官をしているウィリアムは、ヘーリベリーの主席卒業生である」[Galton, 1892, p.208, ゴールトン, 1935, 下巻, p.39]との記述が見られる。

13. ゴルトンによれば 1885 年の会期終了までの入場者数は 9,337 人であり、「ドアの前は自分の番を辛抱強く待つ申込者であふれた」[Galton, 1884a, p.206]。

14. ベルティヨン方式により撮影されたゴルトンの司法写真も存在し (図版②)、フォレストの伝記ではそれはこの 1888 年の訪問の際のものとされている [Forrest, p.209] が、写真には 1893 年 4 月 19 日の日付が書き込まれており、別の機会に撮られたものと思われる。

15. [Galton, 1888]

16. サウス・ケンジントン博物館に場を移してからは頭部の計測も行なわれていた。cf.[Galton, 1908, pp.249-250]

17. 当然それは実りのないものに終わる。「私はロンドン地区で最悪の馬鹿者たち (idiots) から大量の指紋を採取した。[...] しかし特筆すべき違いはなかった。」[Galton, 1892a, p.197]

18. 彼が推測した指紋の機能とは、隆起により汗の排泄を容易にすること、および触覚の補助となることだった。cf.[Galton, 1892a, p.60]

19. cf.[Rhodes, p.143]

20. 筆者が参照できたのは、四巻からなる四つ折の豪華本だった原典

(Physiognomische Fragmente) の刊行後に、普及版として刊行された八つ折の要約版の英訳 [Lavater, 1847] および仏訳 [Lavater, 1998] である。なお、ラヴァターについては以下の各書誌を参照。Ellis Shookman ed., *The Faces of Physiognomy*, Columbia, Camden House, 1993, J-J Courtine, C. Haroche, *Histoire du visage*, Paris, Payot, 1994, F・ダゴニエ (金森・今野訳) 『面・表面・界面』法政大学出版局、1990 年 (今野喜和人による解説も参照)、J・バルトルシャイティス (種村・巖谷訳) 『アペラシオン』国書刊行会、1991 年、国立西洋美術館カタログ 『記憶された身体——アビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫』1999 年。

21. [Lavater, 1847, pp.379-400]

22. 「正面写真と横顔写真の倍率の一致を機械的に確実にする特殊ポーズ椅子について」[Bertillon, 1896, pp.244-248]

23. cf.[Galton, 1907, pp.6-13]。またユダヤ人の合成肖像については、cf.[ギルマン, 1997, pp.130-132]。「ベルティヨン方式」との関連については、cf.[ディディ＝ユベルマン, 1990, pp.76-90]

24. 「あの夢の中の顔は、友人 R の顔でもあり、また伯父の顔でもあった。その顔は、家族同士の類似性を探り出すために、幾人かの者の顔を同じ一枚の乾板の上に撮影するゴールトン重ね写真のようなものである。」[フロイト, 1968, p.118]

参考文献

- バルトルシャイティス, ユルギス 1991 『アベラシオン』 種村・巖谷訳、国書刊行会
- Bertillon, Alphonse 1896 *The Bertillon System of Identification (Signaletic Instructions)*, Chicago, The Werner Company
- Bertillon, A. et Chervin, A. N.D. *Anthropologie métrique*, Paris, Imprimerie Nationale
- Browne, Douglas, and Brock, Alan 1954 *Finger-Prints*, New York, E.P. Dutton
- Courtine, J.-J., et Haroche, C. 1994 *Histoire du visage*, Paris, Payot
- ダゴニエ, フランソワ 1990 『面・表面・界面』 金森・今野訳、法政大学出版局
- ディディ＝ユベルマン, ジョルジュ 1990 『アウラ・ヒステリカ』 谷川・和田訳、リプロポート
- Didi-Huberman, Georges 1997 *L' empreinte*, Paris, Centre Georges Pompidou
- ドイル, コナン 1997a 『詳注版シャーロック・ホームズ全集5』 小池滋監訳、筑摩書房
- 1997b 『詳注版シャーロック・ホームズ全集6』 小池滋監訳、筑摩書房
- 1997c 『詳注版シャーロック・ホームズ全集7』 小池滋監訳、筑摩書房
- Faulds, Henry 1880 'On the Skin-Furrows of the Hand', *Nature*, 22, p605.
- Forrest, D.W. 1974 *Francis Galton : The Life and Work of a Victorian Genius*, New York, Taplinger Publishing
- Freeman, Austin 1907 *The Red Thumb Mark*, London, Collingwood Bros., reprinted in 1986 by Dover Publications, New York. (フリーマン, A. 1982 『赤い拇指紋』 吉野美恵子訳、東京創元社)
- フリーマン, オースチン 1977 『ソーンダイク博士の事件簿I』 大久保康雄、東京創元社
- フロイト, ジークムント 1968 『フロイト著作集2』 高橋義孝訳、人文書院
- Galton, Francis 1884a 'On the Anthropometric Laboratory at the International Health Exhibition', *Journal of the Anthoropological Institute of Great Britain and Ireland*, 14(1884) pp.205-221.
- 1884b 'Some Results of the Anthropometric Laboratory', *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 14(1884), pp.275-287.
- 1888 'Personal Identification and Description', *Nature*, 38, pp.173-7, pp.201-2.
- 1889 *Natural Inheritance*, London, Macmillan, reprinted in 1997 by Genetics Heritage Press, New Mexico.
- 1892a *Finger Prints*, London, Macmillan
- 1892b *Hereditary Genius*, 2nd edition(1st edition in 1869), reprinted in

- 1914, London, Macmillan (ゴールトン, F. 1935 『天才と遺傳』 甘粕石介訳、岩波書店、全二巻)
- 1907 *Inquiries into Human Faculty and Its Development*, 2nd edition, London, J.M. Dent & Sons
- 1908 *Memories of My Life*, London, Methuen
- ギルマン, サンダー・L. 1997 『フロイト・人種・ジェンダー』 鈴木淑美訳、青土社
- ギンズブルグ, カルロ 1988 『神話・寓意・徴候』 竹山博英訳、せりか書房
- Henry, Edward R. 1900 *Classification and Uses of Finger Prints*, London Routledge, reprinted in 1974 by AMS Press, New York.
- Herschel, William J. 1880 'Skin Furrows of the Hand' *Nature*, 23, p.76
- 1916 *The Origin of Finger-Printing*, reprinted in 1974 by AMS Press, New York.
- キットラー, フリードリヒ 1999 『グラモフォン・フィルム・タイプライター』 石光泰夫、石光輝子訳、筑摩書房
- Lavater, Johan Caspar 1847 *Essays on Physiognomy* (4th Edition), London, Thomas Tegg
- 1998 *La Physiognomonie, Paris, L' age d' homme*
- Minakata Kumagusu 1894 'The Antiquity of the "Finger-Print" Method', *Nature*, Dec.27, 1894 = 『南方熊楠全集 第十巻』 平凡社、1973、pp.40-42.
- 南方熊楠 1916 「博士輩の出放題」『南方熊楠全集 第五巻』 平凡社、1972、pp.537-539.
- 村上陽一郎 2000 『科学の現在を問う』 講談社
- 岡本春一 1987 『フランシス・ゴールトンの研究』 ナカニシヤ出版
- Rhodes, Henry T. F. 1956 *Alphonse Bertillon : Father of Scientific Detection*, London, Harrap
- Shookman, Ellis ed.1993 *The Faces of Physiognomy*, Columbia, Camden House
- Silver, Lee M. 1997 *Remaking Eden*, New York, Avon Books (シルヴァー, リー・M. 1998 『複製されるヒト』 東江・真喜志・度会訳、翔泳社)
- Toffler, Alvin 1970 *Future Shock*, New York, Bantam Books (トフラー, A. 1982 『未来の衝撃』 徳山二郎訳、中央公論社)
- 渡辺公三 1991-93 「同一性のアルケオロジー…A・ベルティオンと司法的同一性の誕生」(1)～(3)『国立音楽大学研究紀要』第26集～第28集
- 1993 「顔をてらす光・顔にさす影——F・ゴールトンおよびA・ベルティオンにおける肖像写真と同一性」『省察』第5号(1993年12月)、西田書店、pp.24-54.
- 1994 「近代システムへの〈インドからの道〉あるいは指紋の発見」『現代

個を表象すること

思想』1994年6月号、青土社、pp.198-217.
米本昌平 1997 『クローン羊の衝撃』岩波書店